

Some thoughts on Western academic representations of the Great Japanese Empire

大日本帝国をめぐる西欧の学者による表象についての考察

クレメン・セニツァ

2000年、トロント大学教員で、朝鮮半島近代史研究で知られるAndre Schmidが、英語で執筆された大日本帝国に関する歴史書に対して批判的な論文を発表した。すでに10年以上前の論文ではあるが、私は彼の指摘に同意したいと思う。

Schmid (2000: 951)では、大日本帝国の植民地主義を研究する際には、少し異なる視点から考察した方がよいと指摘されている。彼はここで「日本に関する英語研究は、ゆっくりとしか植民地経験を日本近代史に編み込んでこなかった (English-language studies of Japan have been slow to interweave the colonial experience into the history of modern Japan)」と述べるが、今日でもこの批判は妥当であると考える。

とはいえ、近代史に植民地経験を包括する場合も、結局それは「超国家的な力をなおざりにして、国家中心の歴史を強調する傾向にあった (have tended to emphasize a form of nation-centered history at the expense of those forces transcendent to the nation)」と、彼は結論づける。西欧の歴史学者の多くが、大日本帝国史を研究するため、植民地帝国にかんする最新の学問的アプローチを無視している理由はなんだろうか。一方、日本の歴史研究者が抱える問題はこれと少し違う。Matsuzato (2010: 5)が嘆いたのは、「(世界的に) 活況を呈する帝国研究が、日本の史学では十分に扱われてないこと (insufficient exposure of Japanese historiography in the booming study of empire)」だった。

ところで、Ann StolerとFrederick Cooper (1997) が植民地帝国研究で提示したアイデアも軽視すべきではないだろう。つまり、日本の植民地研究の問題点は、比較が少ないということだ。もちろんまったくないわけではない。イギリスやフランスの植民地帝国との対比がそのなかでもとくに行われている。たとえばMatsusaka (2007: 228)は以下のように述べている。

「日本の植民地政策者は、修正または改革された現地との協定をつうじて、フランスの統合と同化の理念と英国の分離統治の形式のあいだで揺れ動いた (Japanese colonial policy-makers vacillated between the French idea of integration and assimilation and the British mode of separate rule through modified or reinvented indigenous arrangements) 」。

これに対し、Tessa Morris-Suzuki (2008)次のように強調している。「フランス、英国そして日本はみな高度に複雑な帝国システムを保持していた。このシステムにおいて、本国の統治の強さと同化の程度は地域や時代とともに変化した。事実、日本はフランスと英国の先例から折衷的に借用と適応した (France, Britain and Japan all had highly complex imperial systems in which the strength of metropolitan control and the degree of assimilationism varied both between regions and over time, and Japan in fact borrowed and adapted eclectically from both French and British precedents) 」。

ただし、日本はロシア帝国と同様には、「本国 (metropole) 」と植民地との地理的距離があまりなく、いわば「隣接帝国 (contiguous empire) 」であった。また、オスマン帝国とオーストリア＝ハンガリー帝国も同様の政治的実体だった。そこで、Morris-Suzuki (1998: 162)はロシア帝国との比較こそ必要と示唆した。これについてはOguma Eiji (2002: 330)が、日本帝国の国民言説と汎アジア主義について、ロシア帝国やドイツ帝国の植民地政策との類似性を指摘している。

だが、比較が非常に少ないという事実は、私にとって大変驚くべきことである。なぜなら、私たちヨーロッパ人から見ると、日本近代史をたとえばヨーロッパ諸国の歴史と比べることは、問題点の明確化にぜひ必要だからだ。自分とは異なる社会・文化的な背景を利用すべきであるが、この姿勢はまだ十分に人口に膾炙してないようである。比較がほぼ不在なため、大日本帝国を他の植民地帝国と比べる際には、「さまざまな点が独特であり、例外的である」という説明がよく見られる。そのため、英語で書かれた多くの日本の植民地主義論は、結局、日本人論になってしまっている気がする。

この点をもっと詳しく説明すると、明治維新後、日本列島ではさまざまな分野で改革が迅速に行われた。これに比する経験をもった国はないという見解がよく聞かれる。たしかにそのとおりかもしれないが、Harumi Befu (2001: 57)が指摘するように、日本列島に住む人びとは、古くから先進的な国々の産業技術や観念などを見習ってきた。だが、それは日本だけの特徴ではない。日本の政治家がそうした行動を取る100年以上前に、いくつかのヨーロッパの帝国は彼らの対抗する競争相手の戦略と技術を模倣した(Lieven 2003: 228)。一般に、いわば低開発国が強い、成功した国家をマネするわけである。

それが事実だとすると、なぜ学者たちは大日本帝国を「遅参者 (latecomer)」(Duus 1995: 434)、または「模倣者 (mimetic)」(Eskildsen 2002: 393)と名付けているのか。こうした説明には誤りがないかと私は考えている。その理由は、ローマ帝国の後、すべての帝国はなにかしら「mimetic」だったはずだからである。その上、ムッソリーニ帝国は1922年、「第三帝国 (Third Reich)」は1933年であり、大日本帝国よりもさらに遅く出現した事実は否定できないのだ。そうであるならば、Césaire (2000: 36)が主張したように、

ヒトラー帝国がもっとも「mimetic」ではないだろうか¹。逆に、小熊英二 (2009: 9) はドイツ、イタリア、ロシアと一緒に日本を「後発帝国主義国」と名付けた。

ところで、英語で書かれた歴史学の論文には、当時の日本の政治指導者はほとんど何もできず、植民地帝国の形成を望む傾向があったと述べられている。例を挙げれば、Pyle (2007: 227)は、「明治期の日本帝国主義は、国際システムによって期待される程度に優れたものだった (Japanese imperialism in the Meiji period was notable for the degree to which it was prompted by the international system)」が断言している。しかし、Kumar (2010: 120)が明らかにしたように、当時の世界中の政治家にはさまざまな可能性があり、伊藤博文と他の元老もその例外ではなく、植民地帝国の代わりに国民国家を構築し、別の道を選ぶこともできたのである。

そのため、大日本帝国を建設した理由を当時の超大国間の「押し引き (pushes and pulls)」で説明するのは、弁解なのではないだろうか。つまり、日本帝国のエリートがただ外圧に応じたとするのであれば、北海道から南洋群島に至るまでの植民地状況は、非難されるべきではないことになってしまう。さらに、いく人かの西洋史学者、たとえばLieven (2003: 64)は、次のように述べている。

大日本帝国が自身の目的、すなわちアジアから西欧列強を追い出すことに成功した。だが、それは半分真実であった。実は第二次大戦後、アメリカ合衆国の対外方針の結果、フランス、オランダ、イギリスがアジアにおいて植民地を再構築することは実質的に不可能な状況になった。

¹ 彼がヨーロッパの資本家を激しく批判し、このように記述した「... what he cannot forget Hitler is not *the crime* in itself, *the crime against man*, it is not *the humiliation of man as such*, it is the crime against the white man, the humiliation of the white man, and the fact that he applied to Europe colonialist procedures which until then had been reserved exclusively for the Arabs of Algeria, the “coolies” of India, and the “niggers” of Africa.」

加えて、満州国は大日本帝国のもっとも大切な植民地と考えられていたが、1944年には日本側に、朝鮮を日本の一部分として保持しつづけることで、条件降伏も可能ではないかという考慮があったことをKoshiro (2004: 428)は特に強調している。朝鮮半島が本当に二次的な植民地であったのならば、このような考えをもつことは難しくないだろう。

Colás (2007: 28)が提案したように、「多様な集団を支配するため、中心である本国からさまざまな領域に首尾よく拡大したいずれの政体も、たいてい帝国と呼ぶことができる (any single polity that successfully expands from a metropolitan centre across various territories in order to dominate diverse populations can usefully be called an empire)」のである。このように考えれば、大日本帝国の出発点は北海道が併合された1869年にした方がよいと私は思う。だが、Conrad (2014: 4)やTierney (2010: 1)などの欧米の研究者は、日本が台湾を侵略した1895年に帝国が開始されたと考えている。だが、日本は、もう1868年から他のアジア人に対して西欧列強と同様な態度を示していた。しかし1889年の後に「帝国」と名付けられ、それ以前には帝国ではなかったと思いがちのようだ。つまり、Schmid (2000: 956)が記述するように、「日本帝国主義は、明治の事業の欧米風な改革が国内で完成されたのち、ようやく可能となったと思われ、その後ようやく海外進出への自信をもてたのである (Japanese colonialism is seen as possible only after the Western-style reforms of the Meiji project have been completed at home and then are ready to empower the move abroad)」。

これに対し、Eskildsen (2002: 403)は、日本帝国主義が「西洋文明に日本が引きつけられた結果ではない。むしろ、日本が西洋文明に引きつけられる過程の一部を構成した (did not result from Japan's engaging Western civilization; rather, it constituted part of the process of Japan's engaging it)」という説明をおこなった。同じような主張は、Hanazaki (2001: 130)がおこなっている。

アイヌと沖縄の歴史を認識することは、日本列島中心部を占める多数派エスニック集団は、かつて「異国」であった列島の他地域を侵略し、植民地化して、そこに住む独自のエスニック集団を支配し、征服し、同化を強制した (An understanding of Ainu and Okinawan history means acknowledging that the majority ethnic group occupying central Japan invaded those other regions of the archipelago which were once 'alien countries', turned them into colonies, conquered and controlled the independent ethnic groups who lived there and forced them to assimilate) 。

そうだと、日本はいつ民族国家になったのか。フランスの場合、最後の植民地アルジェリアが1962年に解放されたのちに民族国家となったように(Cooper 2005: 22, 156)、日本もサンフランシスコ講和条約が1952年に発効されてから民族国家となったのでないだろうか。だが、Morris-Suzuki (2008)は次のように指摘している。「日本帝国の創造は、日本人役人の流出や、日本国内への移民労働者の流入を単にもたらしたのではない。事実、それはもっと複雑な流れの氾濫をつくりだし、その帰結は今日でもまだ(さまざまなケースで)感じられる (The creation of the Japanese Empire did not simply result in an outflow of Japanese administrators and settlers to the colonies and an inflow of colonial migrant workers into Japan. Instead, it produced much more complex cross-currents whose consequences (in some cases) are still being felt today) 」。言い換えれば、植民地時代の遺産はさまざまな場所に見つけられる。そのうちもっとも影響を受けたのは日本料理だろうが(Cwierka 2006: 138-155)、そのことは東アジア以外ではあまり知られてないであろう。

実地調査で受けた印象は、(私の誤りでないとするならば、)日本人はフランス人やイギリス人と違い、大日本帝国と第二次世界大戦を混同し、もちろん戦争が帝国拡大の一部であったのに、同じではなかったということをまったく忘れてしまっているということだ。

参考文献

- Befu, Harumi. 2001. *Hegemony of Homogeneity: An Anthropological Analysis of Nihonjinron*. Melbourne: Trans Pacific Press
- Césaire, Aimé. 2000. *Discourse on Colonialism*. New York: Monthly Review Press.
- Colás, Alejandro. 2007. *Empire*. Cambridge: Polity Press.
- Conrad, Sebastian. 2014. The Dialectics of Remembrance: Memories of Empire in Cold War Japan. *Comparative Studies in Society and History* 56 (1): 4–33.
- Cooper, Frederick. 2005. *Colonialism in Question: Theory, Knowledge, History*. Berkeley and London: University of California Press.
- Cooper, Frederick, and Ann Laura Stoler. 1997. Between Metropole and Colony: Rethinking a Research Agenda. In *Tensions of Empire: Colonial Cultures in a Bourgeois World*, ed. Frederick Cooper and Ann Laura Stoler. Pp. 1–56. Berkeley, Los Angeles and London: University of California Press.
- Cwiertka, Katarzyna J. 2006. *Modern Japanese Cuisine: Food, Power and National Identity*. London: Reaktion Books.
- Duus, Peter 1995. *The Abacus and the Sword: The Japanese Penetration of Korea, 1895–1910*. Berkeley and London: University of California Press.
- Eskildsen, Robert. 2002. Of Civilization and Savages: The Mimetic Imperialism of Japan's 1874 Expedition to Taiwan. *American Historical Review* 107 (2): 388–418.
- Hanazaki, Kōhei. 2001. Ainu Moshir and Yaponesia: Ainu and Okinawan Identities in Contemporary Japan. In *Multicultural Japan: Palaeolithic to Postmodern*, ed. Donald Denoon et al. Pp. 117–31. Cambridge: Cambridge University Press.
- Koshiro, Yukiko. 2004. Euroasian Eclipse: Japan's End Game in World War II. *The American Historical Review* 109 (2): 417–44.

- Kumar, Krishan. 2010. Nation-States as Empires, Empires as Nation-States: Two Principles, One Practice?. *Theory and Society* 39 (2): 119–43.
- Lieven, Dominic. 2003. *The Russian Empire and Its Rivals*. London: Pimlico.
- Matsusaka, T. Yak. 2007. The Japanese Empire. In *A Companion to Japanese History*, ed. William M. Tsutsui. Pp. 224–40. Oxford: Blackwell.
- Matsuzato, Kimitaka. 2010. Introduction: Empire Studies in Japan. In *Comparative Imperiology*, ed. Kimitaka Matsuzato. Pp. 5–20. Sapporo: Slavic Research Center, Hokkaido University.
- Morris-Suzuki, Tessa. 1998. Becoming Japanese: Imperial Expansion and Identity Crises in The Early Twentieth Century. In *Japan's Competing Modernities: Issues in Culture and Democracy 1900–1930*, ed. Sharon A. Minichiello. Pp. 157–80. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Morris-Suzuki, Tessa. 2008. Migrants, Subjects, Citizens: Comparative Perspectives on Nationality in the Prewar Empire. http://japanfocus.org/-tessa-morris_suzuki/2862 (accessed November 18, 2014)
- Oguma, Eiji. 2002. *A Genealogy of 'Japanese' Self-images*. Melbourne: Trans Pacific Press.
- Oguma, Eiji. 2009. 「日本人」の境界。Tokio: Shin'yōsha.
- Pyle, Kenneth B. 2007. *Japan Rising: The Resurgence of Japanese Power and Purpose*. New York: PublicAffairs.
- Schmid, Andre. 2000. Colonialism and the 'Korea Problem' in the Historiography of Modern Japan: A Review Article. *Journal of Asian Studies* 59 (4): 951–76.
- Tierney, Robert. 2010. *Tropics of Savagery: The Culture of Japanese Empire in Comparative Frame*. Berkeley and London: University of California Press.